

山間地における地域の活性化と福祉活動（その2）

—長野県根羽村における地域づくりの展開と子育て支援—

辻 浩

Study Note about Community Activation and Welfare Activity at Place among Mountains (Second Report) : Community Development Promotion and Support for Bringing up Children in Neba Village Nagano Prefecture

Yutaka Tsuji

Abstract: In this paper, I prove area conditions and neighborhood action in Neba village Nagano prefecture, and I point out the way for community welfare at place among mountains. Composition of this paper is second times visit to Neba village, new activity for community development, support for children and parents, relation between university and local community. I prove that young women take part in “Neba sugikko mochi”, “listen volunteer Nagomi” grow up group for planning Neba Village, plan for support house for old people is promoted, Community development card is promoted. I point out that “Hiyoko club” acts for support children and mothers, many relations defend to be solitude mothers, action for offer fanny experience to children is promoted.

Key Words: Young women's participation, Support house for old people, Community development card, Solitude of mothers

本論は、長野県根羽村の地域状況とそこで暮らす人々の地域活動の様子を明らかにし、山間地域における地域福祉の推進のあり方を考える第2報ある。構成は、①2年目の根羽村調査、②地域づくりの新しい広がり、③村の未来につながる子どもと親の支援、④大学と地域の継続的なかわりのために、となっている。この1年間で、「ねば杉っこ餅」への若い人の参加があったこと、「傾聴ボランティア“和”」が村を考えるグループになってきたこと、高齢者生活支援住宅の計画がすすみ村出身者への働きかけも行なわれたこと、「根羽っこ商品券」が拡大されたこと、を確認し、子どもと親の支援として、「ひよこクラブ」の活動があり、孤独な母親を生まない重層的なつながりをつくり、豊かな体験を子どもに提供する取り組みが広がったことを指摘した。

キーワード：若い女性の参加、高齢者生活支援施設、地域振興券、母親の孤独

1. 2年目の根羽村調査

筆者はゼミ生を連れて、2008年8月19日～22日の日程で、長野県下伊那郡根羽村を訪問した。2007年の夏にも同じように訪問し、そこでうかがった村の状況は「山間地における地域の活性化と福祉活動（その1）—長野県根羽村の地域条件と住民の活動—」（『日本社会事業大学研究紀要』第54集、2007年12月）としてまとめ、根羽村の関係者に送付した。また2008年3月には、「根羽村福祉と健康の集い」に参加し、「住民参加型地域福祉の実践」と題した講演を行なった。

このような経過を経て、2008年8月の根羽村訪問調査では、前年にかがった実践がどう展開したかを深めることと、新たに子育て支援の様子をうかがうことを課題とした。根羽村住民課長の小木曾秀美さんに訪問調査のコーディネートをしていただき、次のようなプログラムを用意していただいた。

- 8月19日 午後 根羽村の福祉の概要説明
「根羽杉っこ餅」の方との夕食・懇談
- 8月20日 午前 「ひよこ学級」参加者との懇談
「男の料理教室」参加者との懇談
午後 池之平集落（戦後開拓地）の訪問
村議会議員の方との懇談
- 8月21日 午前 「傾聴ボランティア“和”」主催の村内バスツアーに参加
午後 「傾聴ボランティア“和”」の方との懇談
教育委員会・民生児童委員関係者との夕食・懇談
- 8月22日 午前 住民課長さんとの懇談
その他、朝食や昼食でお世話になった「キャロット」「たたら」「富久屋」「ひよもの里」「ネバーランド」での情報収集

2. 地域づくりの新しい広がり

（1）「ねば杉っこ餅」への若い人の参加

昨年同様、初日の夕食は「ねば杉っこ餅」の方に作っていただいた。「ねば杉っこ餅」は農村婦人の会として農業や地域のあり方を学びつつ、地域の活性化のために活躍している女性グループである。普段は、旧保育園の調理室に餅つき機を据え、大福餅や五平餅を作って、国道沿いの「ネバーランド」の「ふれあいマーケット」で販売している。また、他の地域に根羽村をアピールするイベントがある時には、品物を携えて率先して参加する。また、私たちのように村を訪問する人がある場合には、依頼にもとづいて、食事を作り交流をしてくれる。このような活動が評価され、近年、「ねば杉っこ餅」は、長野県下で一番輝いている女性グループとして表彰されている。

高齢化率42.4%の村だけに、「ねば杉っこ餅」の活動も高齢期にさしかかった人たちが中心

となり、高齢者に作業を依頼するというかたちであった。その活動に最近、若い女性が参加するようになってきたという。話を聞くと、若い人たちはお餅を作るよりも、得意なパンやクッキーを作り、村に生息する珍しい「ネバタゴガエル」を象ったクッキーが人気を呼んでいるとのこと。世代間交流が大切だと言われる中であって、つい年配者と若い世代と一緒に作業をしようと言いがちなところを、着かず離れずという関係をつくっているようである。自分たちが苦勞してつくってきた活動に若い世代を招き入れ、しかも彼女らの得意なことを発揮する機会を設けている「ねば杉っこ餅」の中心メンバーの懐の深さを感じた。

（２）村を考える住民グループともいえる「傾聴ボランティア“和”」

「傾聴ボランティア“和”」との交流も昨年に続いて行なった。昨年は、高齢者と一緒に巡っている村内バスツアーの昼食会で合流し交流したが、今回は一緒に茶臼山方面に向かう村内バスツアーに参加するとともに、その後、学習会形式での意見交換も行なった。

バスの中では、地域のことに詳しい方から所々で解説があり、それをきっかけとして会話ははずんだ。「ワンワンキャンキャン」鳴くことで有名な「ネバタゴガエル」の生息地ということから開設された「かえる館」、茶臼山での絶景と三河地方を潤す矢作川の源流、樹齢1800年・国の天然記念物に指定されている「月瀬の大杉」を巡って、傾聴ボランティアと高齢者そして私たちは共通の話題をもつことができた。

「傾聴ボランティア“和”」は活動を始めて1年余りの間に、県内で有名になり、他の市町村からの視察も多いという。そういうこともあり、会の発足の経緯をまとめた資料や設立趣意書、規約、傾聴の際の約束ごと、傾聴活動誓約書、訪問時チェックシート、傾聴活動記録シートなどが整えられ、懇談会では丁寧に活動を紹介していただいた。また、一人の高齢者の話をじっくり聞くとという本来の意味での傾聴活動とバスツアーのような皆で楽しく話をするということを組み合わせながら活動するスタイルが定着してきているように見えた。

そのような変化を感じながらも「傾聴ボランティア“和”」の方々が一番驚かされたのは、村を積極的によくしたいという熱意であった。私が懇談会用に用意した資料「根羽村懇談会に向けて」（末尾に掲載）にもとづく私が考える地域づくりの話を中心にメモし、活発な意見交換がなされた。傾聴の姿勢を使ってIターンの人も居心地がいい村にしたいこと、地域の豊かさを発見する努力が必要なこと、自分たちで人生を演出する努力をしなければならないこと、一人で何役もやることを楽しみに変える必要があること、子どもたちの食の安全を確保するためにも地産地消をすすめたいことなど、傾聴ボランティアの枠を超えた村を考えるグループと言ってもいい一面を見せていただいた。

（３）高齢者生活支援住宅の計画と村出身者への働きかけ

昨年の訪問で高齢者生活支援住宅の建設の可能性を調査しているとお話をうかがっていたが、今年はそのことが前進して、村議会でも取り上げられているとのことであった。この実現については、夜間の勤務体制が取れるのかという心配があるし、そこに入所できた人とできなかった人とで不公平感が生じるという問題も指摘されている。しかし最も大きな課題は財政負

担である。

このような課題を抱える中で、「ふるさと納税」も可能になった今日の段階で、村を出て都会で暮らしている人に、ふるさとの状況を伝えることが取り組まれていた。社会福祉協議会がお彼岸やお盆で帰省する人を対象に、村の福祉についての説明会を開催している。資料によれば、村の高齢者の状況や社会福祉協議会の役割、介護保険事業、地域支援事業、今後の課題としての高齢者生活支援住宅と見守り助け合いのネットワークづくりの説明がなされている。この説明会に、今年の春のお彼岸時には3組の家族が、夏のお盆時には6組の家族が参加している。村の状況を理解し協力しようという村外の人は、1口5,000円で社会福祉協議会賛助会員になってもらうことがめざされている。この取り組みは今後、ふるさと納税の積極的活用につながっていくものと思われる。

(4)「根羽っこ商品券」の拡大

地域の活性化の一つの方法として、地域循環型経済の仕組みをつくり、地域の産業や商店を守ることもある。そのことを意識して、2008年度になって「根羽っこ商品券」が拡大された。「根羽っこ商品券」とは、村内の商店で買い物ができる商品券(1,000円券11枚セット=11,000円分)が10,000円で購入できるというものである。はじめて導入された2007年度は子育て支援の性格が強く、18歳以下の子どもしか対象にならなかったが、今年度はそれに加えて、65歳以上の方も対象にした。このことによって、村のほとんどの家庭が「根羽っこ商品券」を利用できるようになった。

この商品券は、対象者1人当たり実施期間中に10セットまで購入することができ、各家庭にとっても商店にとっても喜ばれている。このことが実現できたのは、商工会が団結したことと、村が予算を組んで助成したことが大きかった。このような取り組みから、近隣市の大型スーパーやディスカウントショップにお金が行くことを止め、村内での商売を成り立たせようという住民の意識改革がめざされている。

3. 未来につながる子どもと親の支援

(1)「ひよこクラブ」の発足と活動

「ひよこクラブ」は保育園に上がる前の子どもを育てているお母さんと子どもの会であり、毎月1回、高齢者福祉施設「しゃくなげ」で活動している。20組くらいのメンバーがいるが、各回は数組から10組くらいの親子が集まる。教育委員会社会教育課がかかわる事業ということもあり、当初は子どもと親が分れて、親が学習会に参加するというスタイルだったが、親子で一緒に取り組めることがしたいとの要望から、現在は、子どもを遊ばせながら、母親同士が親しくなることをめざしている。

私たちが訪問した時には、6組の親子がホールで、おもちゃ、室内ブランコ、滑り台で遊び、8月だったこともあり、外にビニールプールも設けられていた。10時頃に集まりはじめ、お昼には帰っていった。

(2) 孤独な母親を生まない重層的なつながり

「ひよこクラブ」に参加したお母さん方にお話をうかがうと、村外（近くは飯田市や愛知県、遠くは東京）で夫と知り合い、夫の仕事や家の都合で根羽村で暮らすことになった方がほとんどだった。舅・姑とは同居の方もいれば近居の方もおり、メンバーの中には村営住宅で暮らしている方もいる。

過疎の村の若いお嫁さんにとって大きな課題は、地域に同世代の知り合いをつくることであり、いろいろ話し合える仲間になっていくことである。そのようなことから、「ひよこクラブ」の活動も講師の話聞く活動から自分たちで自由に交流する活動に切り替えたとのことである。

その意味で、「ひよこクラブ」は若い世代が地域に定着するための取り組みということもできる。それに加えて最近、村に「よさこいソーラン」のグループが生まれ、そこは小さな子どもを含む家族の参加も歓迎しているとのことである。私たちがお話を聞かせていただいた方の中にも2組が「よさこいソーラン」のグループに参加しており、その時の話も含めて村の生活は忙しく充実していると聞かせてくれた。

また、「よさこいソーラン」は村内での発表会でも注目され、住民の間で明るい話題の一つとなっている。そのように暖かい眼差しを向けてもらえる活動に参加することは、村外から来たお嫁さんたちが地域に定着するうえで大きな力になるものと思われる。

(3) 豊かな体験を子どもに提供する取り組み

根羽村では、次世代育成に力を入れており、保育所や村営住宅の整備、出産祝い金の充実、子どもの医療費の無料化などを行ってきた。

それに加えて、学童期の豊かな体験を提供するために、今年度から文部科学省が力を入れている「放課後子ども教室」が開設され、高齢者福祉施設「しゃくなげ」で活動が行なわれることになった。村に公共施設が多くないという事情もあってのことかもしれないが、この事業を高齢者のデイサービスが行なわれている近くで行なうことで、世代間交流の可能性もある活動になっている。

また、議員さんとの懇談の中で、今年8月10日に昔の子どもたちが楽しんだ「ひっかけ漁」を子どもたちに体験させる取り組みが行なわれた。これは、ある人が夏の川で遊んだ子どもの時の楽しい体験が村に帰ることを決意させた大きな原因だったということから取り組まれたものであった。魚の放流などの漁業協同組合の協力はもとより、多くの住民が参加して盛り上がった。このような子ども時代の地域での豊かな体験が、どのようなかたちになるかわからないものの、将来、村を考えるきっかけになることが期待されている。

4. 大学と地域の継続的なかわりのために

(1) 調査を「する側—される側」という関係の心地悪さ

今回の根羽村訪問調査においても、前回同様さまざまなことを学ぶことができた。しかし、

大学にいる教員や学生が学ぶだけでは、現地とのいい関係は生まれたいのではないかと考えている。もちろん、いい報告書を書くことで、現地にお返しをするというのが本筋かもしれないが、そのような報告書を書くことは難しい。形式的であったり難解であったりして、現地にとって意義が感じられない報告書が多いのではないだろうか。

そこで筆者は、できるだけ調査を「する側—される側」という関係を取り払いたいと考えてきた。そのために、特別なヒアリングの機会を設けてもらうよりも、活動とともに体験しながら、そこで見かけたことや交わされた言葉を頼りに、地域と住民の動態をとらえたいと考えている。また、ヒアリングをする際にも、「聞く側—話す側」という関係ではなく、相互の意見交換の中から課題を掬い取りたいと考えている

(2) 調査と懇談会

このような考えから、今回の根羽村訪問では、村議会議員の方や「傾聴ボランティア“和”」の方との懇談、また、住民課長の小木曾さんと学生との懇談の機会をもった。

議員の方や「傾聴ボランティア“和”」の方との懇談に備えて、筆者は後に提示する「根羽村懇談会に向けて」という資料を用意しておいた。これは筆者が1年目の根羽村訪問と他の地域での地域づくりにかかわる取り組み、そして文献から学んでまとめたものである。そこでは住民が取り組むべき地域課題をあげるとともに、役場職員が地域をリードするために研究的に取り組むべき課題をあげてみた。このような、筆者の現時点での思いを提出することで、現地との関係が深まり、その中で予想を超える情報とも出会えるのではないかと考えて取り組んできた。

また、1回目の訪問の時から、時間を取って学生が感想や考えを書き、最終日にはその用紙をもとに調査をコーディネートして下さった方と懇談し、最後にその用紙を提出するようにしてきた。参加した学生の多くは、過疎地で暮らす人たちのいきいきした姿に感銘を受け、そのことを書く。村の将来に役立つ特別のものがあるわけではないが、そういう若い学生の意見が、大学と地域を結びつける力になるのではないかと考えている。

【資料】

根羽村懇談会に向けて

2008年8月

辻 浩（日本社会事業大学）

1. 持続可能な社会の中の福祉

- ・地域の資源の発見と付加価値
- ・若い世代のUターンやIターン
- ・地域内での経済の循環
- ・働きがい・生きがいと共同の実践

2. 根羽村で考えられる「豊かに暮らせる地域づくり」の可能性

- ・近隣ヘルパーの現状と可能性
- ・会食会の現状と可能性
- ・居場所づくりの現状と可能性
- ・ふれあい健康づくりの会の現状と可能性
- ・グループホームの現状と可能性
- ・学校給食食材の自給と紹介
- ・農作物・加工品の直販所の設置
- ・里山の仕事と特産品
- ・マイペース酪農

3. 役場職員による研究の必要

- ・地域密着型福祉の研究
施設、支え手、賃金、社会保険、ボランティア、NPO
- ・地産地消の研究
各農産物の消費量の計算、地産率の計算、流通組織との交渉、直販所の設置支援と運営、地域通貨
- ・Iターン促進の研究
林業従事者の呼び込み、山村体験生活、〇〇オーナー、借地借家の便宜
- ・村外生活者とのかかわりの研究
帰省時の楽しさ演出、ふるさと納税、目的寄付、仕事とマッチングしたUターン
- ・地域への子どもの愛着を育てる研究
森林の価値、食の自給と環境保全、人と人の支えあいの気づき
- ・林業活性化の研究
一部広葉樹への転換（景観、多様性）、環境にやさしい林業、木材流通の新しいかたちの確立
- ・自然エネルギーの研究

[参考文献]

広井良典『持続可能な福祉社会―「もうひとつの日本」の構想―』ちくま新書、2006年

大江正章『地域のカ―食・農・まちづくり―』岩波新書、2008年

玉村豊男『里山ビジネス』集英社新書、2008年

島田修一・辻浩編『自治体の自立と社会教育―住民と職員の学びが拓くもの―』ミネルヴァ書房、2008年

【収集資料】

- ・根羽村『人と自然が輝くふれあいと思いやりのある村づくりをめざして—根羽村地域福祉計画—』2005年3月
- ・根羽村社会福祉協議会「平成19年度 事業報告書」
- ・根羽村社会福祉協議会「根羽村における地域住民支え合い活動総合支援事業について」
- ・根羽村社会福祉協議会「誰もが健康で安心して暮らし、いつまでも住み続けたいと思える村づくり—『しゃくなげ』見学会及び事業説明会—」2008年8月
- ・根羽村商工会『『根羽っ子商品券』のお取り扱いについて』2008年7月
- ・傾聴ボランティア“和”「傾聴ボランティア“和”の発足について」2008年7月
- ・傾聴ボランティア“和”「傾聴ボランティア“和”設立趣意書」2007年5月
- ・傾聴ボランティア“和”「傾聴ボランティア“和”規約」2007年5月
- ・傾聴ボランティア“和”「傾聴の際の約束ごと」
- ・傾聴ボランティア“和”「根羽村民支え合い傾聴活動誓約書」
- ・傾聴ボランティア“和”「訪問時チェックシート」
- ・傾聴ボランティア“和”「根羽村民支え合い傾聴活動記録シート」
- ・傾聴ボランティア“和”「平成19年度 傾聴ボランティア“和”事業報告」
- ・傾聴ボランティア“和”「平成20年度 傾聴ボランティア“和”年間事業計画」
- ・傾聴ボランティア“和”「茶臼山バスツアー アンケート集計」2008年8月
- ・「心に寄り添い支え合い—一人暮らしの高齢者訪問—（傾聴ボランティア“和”）」『信濃毎日新聞』2007年6月
- ・「支える手 のばして—お年寄り訪ね傾聴ボランティア—（根羽村）」『信濃毎日新聞』2007年9月
- ・高齢者福祉施設しゃくなげ「しゃくなげ発 ふれあい便り」2008年9月号
- ・「根羽の高齢者と交流—東京の学生 福祉学を学ぶ一環で—」『信濃毎日新聞』2008年8月22日